

日本における母親の教育価値観及び子どもへの期待が養育態度に与える影響

— 首都圏に居住する母親を中心に —

文 吉英

要 旨

本研究は、日本における母親の持つ教育価値観(理想的教師観、理想的学生観、理想的教育観)、子どもへの期待と養育態度との関連を検討したものである。首都圏に居住する母親 96 名を対象に質問紙調査を実施し、統計的分析を行った。その結果、母親の子どもへの期待として『グローバル志向』『流暢な英語能力』『優秀な成績』『礼儀正しさ』『異文化との交流』『豊富な遊び経験』の 6 因子が、養育態度として『一貫性のないしつけ』『受容』『統制』『自由への容認』『同調』の 5 因子が抽出された。教育価値観と子どもへの期待と養育態度との関連を検討するために重回帰分析を行った結果、『一貫性のないしつけ』には理想的教師観の『学生尊重(負)』が、『受容』には理想的学生観の『従順』と理想的教育観の『創造性』『人材教育(負)』および子どもへの『豊富な遊び経験』の期待が影響していた。『統制』には理想的教師観の『専門性』が、『自由への容認』には理想的教育観の『創造性』が影響していた。『同調』には子どもへの『流暢な英語能力』『優秀な成績』『グローバル志向(負)』の期待と理想的教師観の『学生尊重』『専門性(負)』が影響を与えていることが示された。

【キーワード】 少子化、受験競争、教育価値観、子どもへの期待、養育態度

1. 問題の所在

1990 年代以降、少子化が加速し、日本政府はこれを食い止めるために様々な対策に取り組んできた。その一例として 2004 年より厚生労働省が推進している「子ども・子育て応援プラン」が挙げられるが、この施策の一つの特徴は、過去掲げられていた「ゆとり教育」に代わって、学力向上アクションプランや習熟度別指導などを通じた「生きる力」の育成により、基礎学力の形成が再び重要視されていることである(本田, 2005)。

一方、少子化により定員割れの私立大学は全体の 40%を超えている(私学経営相談センター, 2009)。また、1980 年代後半より教育政策が大幅に改革された結果、過熱していた教育熱が沈静化し(中村, 2005)、私教育の負担が減り大学の進学においても学生の選択の幅が広がってきている(渡辺, 2007)ともされている。しかし、このような現状があるにもかかわらず、学歴志向はより強まり、子どもの有名大学への入学を期待する親が増えている(コアネット教育総合研究所, 2009)。そのため、子どもの学歴獲得のために依然として受験競争に子どもを追い立てる親も少なくない。つまり、

少子化が進み、学力向上を重視する教育政策が次々と実施される中で、子どもが少ない分、親は子どもに対して高い期待を抱き、子どもの教育にも一層熱心になるのである。これは社会における様々な変化が、子どもの教育を含めた親の養育にも影響を与える可能性があることを示唆する。しかし、以上のような親の教育熱心は「我が子中心の子育て」、「過保護・過干渉の子育て」など個人主義的で子どもの発達に望ましくない養育態度(本田, 2005; 鈴木, 2013)につながることも考えられ、さらにそれにより子育てにおける様々な問題が引き起こされることも推測できる。

このことから、少子化の中で親が家庭においてどのような養育を行っているかを把握することは、少子化により生じる子育て問題やその改善を考え、今後の良い子育てのあり方を探るうえで極めて重要であろう。

2. 先行研究及び研究目的

「養育態度」とは、親などの養育者が子どもを育てる際に取る態度及び行動のことを指す(南, 1999)。先行研究では、養育態度はその基底にある信念、価

価値観といった認知的な特性に関連する (Luster, Rhoades, Haas, 1989) ことや、親の社会的地位(学歴、職業、年収)、就業形態などの属性と関連している(田淵, 1993; 浅川・森岡, 1994) ことが示されている。また、親は子どもが社会的に容認される人になるように様々な行動や生活様式を求めるが、このような親の希望が養育態度を決める(田淵, 1993; Park, 2004) ことも指摘されている。このことから、養育態度は親の価値観、親の期待、属性に関連することが推測できる。養育態度は様々な価値観に影響されると考えられるが、学力や学歴が再び重視されている状況からみると、親の養育態度は教育に対する価値観、つまり教育価値観に影響されることが推測できる。

「教育価値観」とは、「望ましい教育のあり方について人々が抱えている信念の集合体(加賀美, 2004; 2007)」であり、良い教師、良い学生、良い教え方の3領域からなる(加賀美, 2004; 2007)。荒牧(2009)は日本の親が受験教育に熱心になる背景には、学校教育や教師に対する不信と不満があるとしている。つまり、子どもの学力や学歴が求められる社会の中で、親は学校の教師や授業に満足できず、より専門性のある教師を求めて塾のような学校外教育に依存し、それが受験教育への熱心さにつながると考えられる。このように、親が教師や教育内容についてどのように考えているかは子どもの教育にも影響するため、親の教育価値観を探るうえで、教師像に対する検討は非常に重要である。これを反映して、親の教育価値観に関する研究には、望ましい教師観、学校の教育において重要と思うことなど理想的教師や教育内容について検討したものが多く(久富, 1990; 門脇・藤田 2000)。門脇・藤田(2000)は、日韓中の教員、保護者、生徒の教育意識を比較検討した。その結果、日本の保護者が最も良いと考える教師は、責任感と情熱を持った教師であることが分かった。さらに、門脇ら(2000)は、日本人は「国家の発展のために役立つ人材を育成する教育」より、「児童・生徒の自己実現・人格形成」を重視し、かつ「社会改革・新しい社会や文化の創造」より、「伝統文化の継承・社会秩序の維持」を教える教育を期待すると述べている。

一方、親は子どもの教育を考えるうえで、子どもの学生としてのあり方、つまり、理想とする学生像があると推測できるが、親の持つ理想的学生観を検討したものは数少ない。また、これらの教師、学生、

教育内容の3領域からなる教育価値観と養育態度との関連を検討したものは管見の限り見当たらない。

また、親の期待も養育態度に関連する要因として示されているが、親の「期待」とは、「子どもの行動、態度、成就、能力に対して親の持つ主観的で、未来志向的な望みのこと」を指す(Park, 2004)。河村(2003)では、親の期待として進学・学業期待、社会への適応期待、就職期待、従順・見栄期待、苦勞への報い期待の5因子、石橋・堂野(2006)では、良い子、進学・就職、自主性、社会貢献、社会性の5因子が抽出されるなど、親の持つ様々な期待が抽出される中でも学業に対する期待は殆どの研究で同様に示されている。これらの研究における学業に対する期待とは主にクラス内での良い成績への望みのことを指すが、近年日本におけるグローバル化の影響による期待も存在すると推測され、このような視点も含めたいうで親の期待を検討する必要がある。

さらに、学歴、職業有無、社会的地位といった親の持つ属性と養育態度との関連に焦点を当てた研究もある。田淵(1993)、本田(2008)、文(2015)では、養育に影響を与える要因として母親の最終学歴が示されており、神原・高田(2000)では父母の学歴以外に、職業、職種、年収といった社会的地位が子育てと関連することが示されている。

以上のように、親の教育価値観、期待、属性が養育態度と関連することを示した様々な研究がなされてきた。上述した研究が親の教育価値観、期待、養育態度のいずれかを明らかにしたもの、あるいは、期待と養育態度、属性と養育態度といった2つの関連を探ったものであることに対し、教育価値観、期待、属性という3つの視点から親の養育態度を明らかにした研究もある。文(2015)は韓国人母親を対象に母親の教育価値観、子どもへの期待が養育態度にどのような影響を与えるかを検討した。その結果、子どもの学業と関わる期待(グローバル志向と優秀な成績)が統制、過保護の養育態度に影響を与える要因であることが示された。さらに、統制、過保護の養育態度が韓国をより学歴中心の社会へ向かわせる可能性があることを示唆した。韓国が日本以上に急激な少子化が進んでいる点から、文(2015)の結果は日本の少子化に伴う教育や養育の諸問題を考えるうえで重要な視点を提供する。しかし、韓国は基本的に中学受験や高校受験がなく大学受験が中心となっており、1997年の経済危機をきっかけに日本よ

り早めに英語の重要性が高まっている社会である。1点では、教育制度や社会的風潮が異なる日本においても日本社会の現状や先述した3つの視点を踏まえた研究が必要であると言える。

以上の先行研究の知見から、本研究では親の教育価値観、期待、属性といった3つの視点から養育態度との関連性を検討することにする。

まず、学力向上重視の施策の実施、受験競争、日本における少子化、グローバル化といった社会的文脈の中で、親が子どもの対してどのような期待、養育態度を持っているかを明らかにし、その後、母親の教育価値観、期待、属性（仕事の有無、家庭の年収、最終学歴）と養育態度とはどのような関連があるかを検討することを目的とする。本研究では、特に子どもとより多くの時間を過ごし、養育において主導的な役割を果たす母親（牧野・渡邊・船橋・中野, 2010）に注目する。

3. 研究方法

3.1 調査時期及び対象者

2012年8月～9月、首都圏（東京都、埼玉県、千葉県）に居住する小学生（公立小学校）の子どもを持つ日本人母親102名を対象に質問紙調査を実施した。

対象者は協力者を介してスノーボール方式で集め、質問紙は郵便で配布、回収した。そのうち、回答に著しく不備があったものを除いた結果、96名からの回答が有効であった（有効回答率94.1%）。

対象者の「年齢」は、30代が44名（45.8%）、40代が49名（51.0%）、50代が4名（4.2%）であった。「仕事の有無」に関しては、していると答えた人が64名（66.7%）であった。「最終学歴」は中・高卒が22名（22.9%）、短大卒（専門学校を含む）が47名（49.0%）、大学卒以上が27名（28.1%）であった。

3.2 手続き

質問紙作成にあたって、事前調査として2012年2月～3月にかけて、首都圏に居住する小学生の子どもを持つ日本人母親6名を対象に1～2時間程度の半構造化インタビューを行った。

インタビューでは、普段子どもにどのような教育を行っているか、子どもにどのような期待を持っているかを質問し、得られたデータを文字化した後、KJ法（川喜田, 1967）におけるグループ分けの手法を参考にし、分析した。

質問紙は1.養育態度尺度、2.教育価値観尺度、3.子どもへの期待尺度、4.フェースシートで構成されている。質問項目はインタビュー結果をもとに、関連文献から項目収集を試み、養育態度尺度は戸田（2006）、Lee（1991）を参考に34項目を作成した。教育価値観尺度は理想的教師観、理想的学生観、理想的教育観の3領域からなる加賀美（2007）の教育価値観尺度（短縮版）の31項目を使用した。子どもへの期待尺度は事前調査で得られた結果をもとに25項目を作成した。これらの尺度においては「1. まったく当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの5件法で回答してもらった。

フェースシートは「年齢」、「仕事の有無」、「最終学歴」、「世帯年収」、「子どもの数」などを問う項目からなる。

4. 結果

4.1 教育価値観尺度短縮版（加賀美, 2007）に対する信頼性分析結果

本研究では、母親の養育態度と関連する要因として母親の期待と教育価値観という認知的特性に注目する。教育価値観については加賀美(2007)の教育価値観尺度短縮版を用い、養育態度との関連を検討することにする。この尺度を援用したのは、これまで行われた教育価値観を扱った数多くの研究が、教師、学生、授業のいずれかに焦点を当てたものであることに対し、加賀美（2007）の教育価値観尺度はこの3領域を含めたうえで作成したものであり、下位尺度の項目も教師像、教育像に関する研究（坂野,1999; 伊藤,2000; 加藤・加瀬ほか,1987; 伊藤,1995; 佐藤,1990; 李,1998 など）からの知見が十分反映されているためである。

以上の理由に加え、この尺度を使用し国別、世代別に教育価値観を検討した研究（加賀美, 2004; 2007; 2010; 2013）が数多くなされていることから、本研究における母親の教育価値観の因子構造も同様であると想定し本来の因子ごとに度信頼性分析を行うことにより、その安定性を確認した。以下では、教育価値観尺度の下位尺度の内容と信頼性分析の結果（表1）について述べる。

まず、教師観の『熱意』は、教師の情熱や指導方法などを表す5項目からなり、信頼性を検討したところ α 係数は.637であった。次に『専門性』は、教師の教え方や専門知識などを表す4項目からなり、

α 係数は .675 であった。『学生尊重』は、教師の学生への理解や配慮などを表す 2 項目からなり、 α 係数は .654 であった。最後に『教師主導』は、教師の権威性を表す 2 項目からなり、 α 係数は .617 であった。

次に、学生観の『意欲』は、学生の学習における好奇心や熱心さなどを表す 2 項目からなり、 α 係数は .677 であった。また『従順』は、学生の教師への素直な態度を表す 2 項目からなり、 α 係数は .664 であった。『規則遵守』は学生の社会規範遵守を表す 2 項目からなり、 α 係数は .659 であった。

表 1. 教育価値観(短縮版)(加賀美, 2007)の信頼性分析結果

理想的教師観	熱意 ($\alpha = .637$)	学生に忍耐強く説明する	
		熱心に指導する	
		学生を励まし希望を与える	
		学生の長所をほめる	
専門性 ($\alpha = .675$)	正義感が強い	専門分野の知識が豊富だ	
		いろいろな授業方法を工夫する	
		説明がわかりやすい	
学生尊重 ($\alpha = .654$)	博識で視野が広い	教師は学生と対等な立場で接する	
		クラスでは学生の自主性を重んじる	
教師主導 ($\alpha = .617$)		教師として威厳をもって学生に接する	
		クラスのことは教師がすべて決める	
理想的学生観	意欲 ($\alpha = .677$)	好奇心が旺盛で積極的だ	
		努力を惜しまず向上心がある	
	従順 ($\alpha = .664$)	教師の意見を尊重する	教師の提示した方法に従う
授業のじゃまになることはしない			
規則遵守 ($\alpha = .659$)		欠席や遅刻をしない	
理想的教育観	人材教育 ($\alpha = .717$)	人のために役立つ人間を育てる	
		社会に貢献する人間を育てる	
	文化的視野 ($\alpha = .689$)	異文化を理解し異文化の人々と積極的に交流する人間を育てる	
		ものごとを地球規模で考える人間を育てる	
	自主独立 ($\alpha = .746$)	学生と社会に関するメッセージを伝える	学生の意欲を引き出す
			学生の素質や可能性を引き出す
社会化 ($\alpha = .679$)	世間の常識を教える	自分で判断し行動する人間を育てる	
		規則に縛られず自由に行動することを促す	
創造性 ($\alpha = .702$)		世間の常識にとらわれない自由な生き方を促す	

最後に、教育観の『人材教育』は社会への貢献のための人材を育てることを表す 2 項目からなり、 α 係数は .717 であった。『文化的視野』は国際性や広い視野を持つ人間を育てることを表す 2 項目からなり、 α 係数は .689 であった。『自主独立』は自律性や自発性を持つ人間を育てることを表す 3 項目から

なり、 α 係数は .746 であった。『社会化』は社会規範や通念を教えることを表す 3 項目からなり、 α 係数は .679 であった。『創造性』は学生の自由さを中心とする教育のことを表す 2 項目からなり、 α 係数は .702 であった。以上のように、教育価値観尺度(加賀美, 2007)の全ての下位尺度において、一定の内的整合性が認められ、母親の教育価値観を測定するうえでも安定した尺であると考えられる。

4.2 母親の子どもへの期待(因子分析結果)

子どもへの期待尺度 (25 項目) に対して主因子法による (プロマックス回転) 因子分析を行った。十分な因子負荷量を示さなかった項目 (.35 以下) や複数の因子に高い負荷量を示す 7 項目を除外した結果、6 因子 (18 項目) が抽出された (表 2)。さらに、各因子の内的整合性を確認するために信頼性係数を算出した。

表 2. 子どもへの期待の因子分析結果

項目内容	I	II	III	IV	V	VI
第1因子 グローバル志向($\alpha = .828$)						
将来、世界で活躍してほしい	.898	-.121	-.052	.153	.023	-.163
将来、海外で仕事してほしい	.758	.254	-.030	-.109	-.075	-.001
将来、海外に行って勉強してほしい	.678	-.014	.171	-.004	.056	.095
第2因子 流暢な英語能力($\alpha = .778$)						
英語の塾に通って、英語が話せるようになってほしい	-.245	.833	.106	.131	-.040	-.193
他の科目よりも、英語を優先して勉強してほしい	.251	.669	.003	.076	-.281	.081
小学生のうちに、留学して英語が話せるようになってほしい	.028	.613	.028	-.270	.018	.255
英語の話せる子と友達になってほしい	.170	.505	-.067	-.052	.207	.108
英語で書かれた本や英語の勉強ができる映画を見てほしい	.166	.417	.076	.031	.295	-.290
第3因子 優秀な成績($\alpha = .748$)						
今より成績が上がってほしい	.074	-.080	.787	-.086	.087	.059
学校以外の教育を受けて、試験でより良い点数を取ってほしい	-.061	.201	.722	-.030	-.054	-.017
いつもクラスの中で、成績が上位圏でいてほしい	.072	.033	.653	.137	-.074	.079
第4因子 礼儀正しさ($\alpha = .741$)						
きちんと挨拶する子になってほしい	.015	.036	-.046	.895	-.131	.123
思いやりの気持ちのある子になってほしい	.080	-.109	.077	.627	.173	.095
第5因子 異文化との交流($\alpha = .696$)						
自分の国のことだけでなく、世界の色々な国にも関心を持ってほしい	.007	-.188	.074	-.063	.790	.123
色々な国の人と友達になってほしい	.029	.137	-.157	.077	.698	.010
第6因子 豊富な遊び経験($\alpha = .561$)						
勉強の時間よりも、遊ぶ時間をたくさん持ってほしい	.019	.072	-.274	.036	.015	.581
キャンプなどの自然とふれ合う経験をしてほしい	-.043	-.080	.264	.108	.075	.576
子どもらしく、自由に遊んでほしい	-.117	.201	-.035	.236	.152	.429
因子間相関						
I		-.547	.136	.089	.370	-.030
II			-.172	.126	.312	.028
III				-.114	-.050	-.157
IV					.312	.296
V						-.309
VI						

第1因子は将来、海外進出することを望む内容(3項目)であることから、『グローバル志向』($\alpha=.828$)と命名した。第2因子は英語が上手になることを望む内容(5項目)であることから『流暢な英語能力』($\alpha=.778$)と命名した。第3因子は良い成績を望む内容(3項目)であることから、『優秀な成績』($\alpha=.748$)と命名した。第4因子は礼儀正しさを人への配慮を望む内容であることから『礼儀正しさ』($\alpha=.741$)と命名した。第5因子は色んな国に関心を持つことを望む内容(2項目)から『異文化との交流』($\alpha=.696$)と命名した。第6因子は勉強より外での遊びや自然体験をすることを望む内容(3項目)であることから『豊富な遊び経験』($\alpha=.561$)と命名した。

4.3 母親の養育態度(因子分析結果)

養育態度尺度(34項目)に対して、因子分析を行った。因子分析は4.2と同様の手続きで分析を行った。その結果、以下の5因子(14項目)が抽出された(表3)。

表3. 養育態度の因子分析結果

項目内容	I	II	III	IV	V
第1因子 一貫性のないしつけ($\alpha=.714$)					
その時の気分しだいで、子どもに決まりを押し通したり、緩めたりする	.893	-.006	.009	.058	-.063
子どもが同じことをしても、時によって叱ったり、叱らなかったりする	.547	.243	.063	-.094	.101
子どものために作った決まりをよく変える	.533	-.144	.080	.001	.105
第2因子 受容($\alpha=.666$)					
子どものしたいことは制限しないで、何でもさせている	.126	.669	-.274	.033	.092
子どもの好きなように、いつでも外出させる	-.012	.657	.135	-.086	-.121
子どもの行きたい所へは、子どもの言う通りに行かせてやる	-.112	.636	.123	.118	-.037
第3因子 統制($\alpha=.649$)					
子どもがすべきことをし終えるまで、何回も指示する	-.105	.014	.717	.059	.176
何事もどうすべきかを子どもに細かく指示する	.190	.005	.608	.063	-.106
子どもを自分の言いつけどおりに従わせる	.119	.022	.505	-.150	-.045
第4因子 自由への容認($\alpha=.568$)					
子どもが理由もなく学校を欠席しても放っておく	.092	-.055	-.013	.962	-.045
子どもが何時に帰ってきて構わない	-.109	.132	.009	.404	.080
第5因子 同調($\alpha=.593$)					
周りのお母さんの育て方を参考にして、私もそう育てようとする	.128	-.188	-.015	-.060	.706
周りのお母さんが子どもにやっつけてあげるのは、私も子どもにやっつけてあげる	-.069	.152	.063	.095	.635
因子間相関	I	II	III	IV	V
I	1	-.147	.399	.025	.229
II		1	.098	.124	.144
III			1	-.031	.215
IV				1	.100
V					1

第1因子は母親の気分や都合により子どもへの態度が変わる内容(3項目)であることから『一貫性

のないしつけ』($\alpha=.714$)と命名した。第2因子は子どものやりたいことを全部受け入れる内容(3項目)であることから『受容』($\alpha=.666$)と命名した。第3因子は子どもことを細かく指示する内容(2項目)であることから『統制』($\alpha=.649$)と命名した。第4因子は子どもが自由に行動することをあまり気にしない内容(2項目)であることから『自由への容認』($\alpha=.568$)と命名した。第5因子は周りのお母さんたちのやることを意識し、同様に振る舞おうとする内容(2項目)であることから『同調』($\alpha=.593$)と命名した。

4.4 教育価値観及び子どもへの期待が養育態度に与える影響(重回帰分析結果)

教育価値観、子どもへの期待、養育態度、属性間の相関を検討した。その結果、教育価値観、子どもへの期待と養育態度との間で有意な相関が見られた²。

以上の結果を踏まえ、養育態度に教育価値観および子どもへの期待はどのように影響しているか検討するため、養育態度を基準変数、教育価値観、子どもへの期待を説明変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った(表4)。

表4. 養育態度と教育価値観、子どもへの期待の重回帰分析結果

		養育態度						
		一貫性のないしつけ	受容	統制	自由への容認	同調		
		β(標準偏回帰係数)						
教育価値観	教理思想的	熱意	.203	.186	.302**	.130	.064	
		専門性	.046	.030	.130	-.044	-.195*	
		学生尊重	-.240*	.110	-.077	.094	.285**	
		教師主導	-.097	-.012	-.113	.020	-.115	
	学理思想的	意欲	-.047	.005	-.033	.013	-.085	
		従順	-.033	.268*	-.028	.156	-.069	
		規則遵守	-.066	.016	-.058	.027	.148	
		教育思想的	人材教育	.018	-.314**	-.064	.061	.093
			文化的視野	-.077	.060	-.047	.005	.125
			自主独立	.000	.118	-.028	-.015	.023
社会化	-.013		-.018	-.020	.033	.016		
創造性	.040		.265**	-.182	.314**	-.089		
子どもへの期待	グローバル志向		-.103	-.064	-.098	.068	-.274*	
流暢な英語能力	.014	.157	.037	.059	.355**			
優秀な成績	.157	-.133	.146	.033	.297**			
礼儀正しさ	-.021	.006	-.031	-.062	-.059			
異文化との交流	-.095	-.069	-.012	-.057	-.073			
豊富な遊び経験	.022	.249*	.046	-.079	.030			
R ² (重決定係数)		.058*	.237***	.091**	.099**	.282***		

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

β: 標準偏回帰係数

R²: 重決定係数

その結果、『一貫性のないしつけ』には、教師観の『学生尊重』が負の影響を与えていた ($R^2 = .058, p < .05$)。

『受容』には、学生観の『従順』、教育観の『創造性』、期待の『豊富な遊び経験』が正の影響を与えており、『人材教育』が負の影響を与えていた ($R^2 = .237, p < .001$)。

『統制』には、教師観の『専門性』が正の影響を与えていた ($R^2 = .091, p < .01$)。

『自由への容認』には、教育観の『創造性』が影響を与えていた ($R^2 = .099, p < .01$)。

『同調』には、期待の『流暢な英語能力』『優秀な成績』、教師観の『学生尊重』が正の影響を与えており、期待の『グローバル志向』、教師観の『専門性』が負の影響を与えていた ($R^2 = .282, p < .001$)。

『一貫性のないしつけ』、『統制』、『自由への容認』に対する重決定係数(R^2)が、それぞれ .058、.091、.099 と低い数値であるところに留意する必要がある。

5. 考察と今後の課題

本研究では、母親の子どもへの期待、養育態度を明らかにし、教育価値観、子どもへの期待と養育態度との関連を検討した。

まず、母親の子どもへの期待がどのようなものかを検討した結果、6因子が抽出された。そのうち、『グローバル志向』、『流暢な英語能力』、『異文化との交流』は、従来の親の期待に関する研究 (Park, 2004 ; 河村, 2003; 石橋ら, 2006) では抽出されなかった因子である点で、新たな知見を示したと言えよう。これらの期待が抽出された背景としては、まず日本におけるグローバル化の進展が挙げられる。また、そのグローバル化に対応した教育環境づくりのために文部科学省が推進し始めた小学校における「外国語活動」の影響も考えられる。2011年より小学3年生から外国語活動は必修となり、中学・高校では英語科目のコマ数が増え、英語で授業を行うことが促されるなど、以前にも増して英語の重要性を強調するような政策が次々と打ち出されている。そのため、英語が子どもの学業成績と直接関わってくることになり、親の英語力の重要性への意識が高まったためではないかと考えられる。一方、文 (2015) では、本研究と同様の尺度を用い、韓国人母親の子どもへの期待を明らかにした結果、一つの因子として本研究と同様の『グローバル志向』が抽出された。韓国人

母親の持つ『グローバル志向』期待は、将来の海外進出と英語力の両方を含む望みであった。それに対し、本研究における日本人母親の『グローバル志向』期待は、海外進出のみを指すもので、英語力については『流暢な英語能力』というもう一つの因子が抽出され、細分化された結果となった。このことから、韓国人母親は現在期待している英語力を子どもが将来に海外に出ることと延長線上にあるものと考えていることが窺える。一方、日本人母親は子どもが将来海外に出ることと英語力を持つことを別のものとして捉えており、子どもに期待する英語力が必ずしも子どもの将来に結びつくものと考えていない可能性が考えられる。

次に、養育態度がどのようなものかを検討した結果、『一貫性のないしつけ』『受容』『統制』『自由への容認』『同調』の5因子が抽出された。また、母親の教育価値観、期待、属性が実際の養育態度にどのように影響しているのかを検討した。以下では、重回帰分析の結果について、養育態度の因子ごとに考察を行う。

『一貫性のないしつけ』には、教師観の『学生尊重 (負)』が影響を与える可能性が見られた。これは『学生尊重』の項目から考えると、学生と対等な立場で接せず、学生の自主性を尊重しない教師を望む母親は『一貫性のないしつけ』をすることを表す。教育における教師と生徒の勢力関係が家庭における親子関係と類似する (Hofstede, 1980) ことから、母親は教師と養育における自分自身のあり方を同一視する可能性が考えられる。つまり、学生を尊重しない教師を望む母親は、養育場面で子どもの意見や意思を尊重せず、母親自身が主導権を持って子どもを育てようとするのが推測される。そのため、母親は子どもよりも自分中心の養育態度となり、自分の気分や都合によって、子どもを叱ったり叱らなかつたりし、子どもと作った決まりなどを勝手に変えるなど『一貫性のないしつけ』をすると考えられる。

『受容』には、学生観の『従順』、教育観の『創造性』『人材教育 (負)』、期待の『豊富な遊び経験』が影響を与えていた。これは教師の教えに従順な学生が理想と考え、人材教育ではなく、創造性を育てる教育を重視し、かつ子どもに豊富な遊び経験を期待する母親は『受容』の養育態度を取ることを表す。つまり、学校教育に対して時期的に程遠い人材教育よりは自由な生き方を教える創造性を育む教育を望

み、教師に素直に従う学生が良い学生と思い、なおかつ、学業よりは遊ぶ時間を持つことを期待する母親は、勉強は学校で学ぶことだけで十分だという考えを持っており、子どもは子どもらしく行動することが良いと考えていると推察できる。したがって、母親は子どもがやりたがることは制限せずやらせる『受容』の養育態度を取ると考えられる。

『統制』には、教師観の『熱意』が影響している可能性が見られた。これは熱意のある教師が理想であると考えられる母親は『統制』の養育態度を取ることを表す。研究背景でも述べたように、近年日本の教育においては再び学力向上が重要視されている。このような状況の中で、母親は子どもの学力向上のために「忍耐強く説明する」、「熱心に指導する」など熱意のある教師を望むと推測できる。そのため、学力向上を意識し、熱意のある教師を理想とする教師観を持つ母親は、子どもの学業と関わる養育場面において子どもがきちんと勉強の内容を理解し、習得できるように何回も細かく指示したりする『統制』の養育態度を取ると考えられる。

『自由への容認』には、教育観の『創造性』が影響を与えている可能性が見られた。『創造性』の項目からみると、規則や常識に縛られず、自由に行動することを重視する母親は『自由への容認』の養育態度を取ることを表す。小学生にとって守るべき規則と言えるものには、毎日出席する、遅刻をしないなどの校則がある。子どもがこのような規則に捕われず、自由な行動や生き方を教える教育を理想とする価値観を持つ母親は、子どもの欠席や帰宅時間についてもあまり気にしないなど子どもが自由に行動することも容認する養育態度を取ると考えられる。

『同調』の養育態度には、期待の『流暢な英語能力』『優秀な成績』『グローバル志向(負)』、教師観の『学生尊重』『専門性(負)』が影響を与えていた。これは子どもに流暢な英語力や優秀な成績を期待するが、グローバル志向は期待せず、かつ専門性のある教師ではなく学生と対等な立場から接する教師が理想的であると考えられる母親は『同調』の養育態度を取ることを表す。流暢な英語能力を期待しながらも、子どもが将来海外で仕事し、活躍することは期待していない(『グローバル志向』負の影響)点から考えると、本研究における母親が子どもに対して求める英語力とは海外で必要な英語力ではなく、現在の成績や進学、将来の国内での就職に必要な英語力であ

ることが窺える。子どもに英語力や良い成績を期待しながらも、教師に対して専門性は重視しない母親は子どもに受験をさせようとする母親である可能性が考えられる。一般的に受験の準備は学校より塾に任せる傾向があるため、子どもの学業についても塾を中心に考えると推測できる。本調査に先だって行われたインタビュー調査では「受験を考えている母親たちの間では塾や習い事などの情報を共有し」、「周りの母親の育て方について意識してしまう」という語りが多数あったことから、子どもの受験を考えている母親は、子どもに英語や良い成績を期待するが、教師の専門性は重視せず、厳しい競争を準備する中で周りの母親の育て方に注目しながら自分の子どもも同様に育てようとする『同調』の養育態度を取ると考えられる。

以上では、日本における母親の教育価値観、子どもへの期待が養育態度にどのように影響しているのかについて述べた。以下では、最も多くの要因に影響されていた『受容』と『同調』の養育態度に焦点を当て、総合的考察を行う。

『受容』の養育態度は、「子どものしたいことは制限しないで、何でもさせている」という項目から分かるように、子どものやりたいことを尊重し、受け入れる養育態度である。『受容』が学業と関わる期待に影響されず、教師の教えに従順である学生を理想とする価値観、子どもらしい自由な生き方を育てる教育を重視する価値観に影響されていたことから、『受容』の養育態度は、数年後の子どもの将来を考えるよりは現時点では小学生としての学校生活を充実させることを重視する態度であると考えられる。つまり、『受容』の養育態度は、学歴社会や厳しい受験競争といった日本の社会的風潮に影響されず小学生の時期にある子どもの意思を尊重した養育態度であると考えられる。文(2015)では、韓国人母親の子どもを受け入れるような養育態度として『共感的理解』という因子が抽出された。これは「家で子どもと楽しい時間を過ごす」、「子どもとあまり色々なことを一緒にしない(逆転項目)」、「子どものことに十分気を配っている」などの項目が含まれており、積極的に子どもと時間を過ごし、子どもの気持ちを理解しようとする養育態度である。さらに、学生の意欲、素質、可能性を引き出す『自主独立』の教育を理想と考える母親が『共感的理解』の養育態度を取る傾向があった。このことから、日本人母

親は、子どもが子どもらしく現在の生活を楽しみながら創造性が育つことを望み、子どものことを受け入れる『受容』の養育態度を取ることに對し、韓国人母親は、子どもの適性や可能性を見つけることを望み、子どもと時間を共有し、一緒に何かをし、子どものことを受け入れる『共感的理解』の養育態度を取ることが分かる。

一方、『同調』の養育態度は、「周りのお母さんの育て方を参考にして、私も同じように育てようとする」という項目から分かるように、母親が周りの母親たちの育て方を意識して行う養育態度である。『同調』には学業と関わる期待、教師の専門性を重視しない価値観が影響していた。このことから、母親は日本社会に定着している学歴重視の価値観と近年学力・英語力の向上を目指した施策の影響により形成された期待を実現し、子どもが厳しい競争で後れを取らないように常に周囲を意識して模倣するような態度を取っているのではないかと推察できる。『同調』の養育態度は、母親が周りの母親たちの行動を目にし、その通りに子どもにもさせる態度であるため子どもの意思が尊重されにくい養育態度であると考えられる。文 (2015) でも、韓国人母親の養育態度として『同調』が抽出され、この態度には本研究と同様に『優秀な成績』が影響していた。このことから、子どもに対して『優秀な成績』への期待を持つ日本人母親と韓国人母親は『同調』の養育態度を取ることが窺える。これらの結果が得られた理由としては次のように考えることができる。近年、日本は少子化が進む中でも学力が重視されることにより、学生間の競争は依然として激しい。また、韓国は、受験は大学受験であり、さらに「大学修学能力試験」(日本のセンター試験にあたる)と呼ばれる大学受験は、年一回しか行われぬ。そのため、親と学生は常に大学受験のことを考えざるを得ない環境に置かれ、受験に対する負担も非常に大きいと考えられる。小・中・高までの時期は、その一回の試験のための準備期間となり、その中で学生間の競争は日本以上に激しいものと思われる。このように、学歴・学力ために過度な競争が不可避な状況で、日韓における母親は、子どもが後れを取るのはないかといった教育に対する不安を感じる可能性が考えられる。岸川・金児 (2000) によると、状態不安³の高い場合、他者へ同調することによって、不安を低減させようとするという。このことから、日本人母親と韓国人

母親は、周りの母親たちの行動に同調することによって子どもの教育に対する不安を低減させ、人と同じであることに安心感を覚えようとしているのではないだろうか。

以上のように、本研究では母親の養育態度が「教育価値観」、「子どもへの期待」という母親個人の持つ認知的特性に影響されることが示された。また、母親の教育価値観と子どもへの期待には日本社会の学歴主義、受験競争と近年の英語力の重要性への認識の高まりにより形成されたものが存在しており、それらの価値観や期待に影響される養育態度に対する再考の必要性が見いだされた。

本研究は、対象者が首都圏に居住しており、また、小学校という特定の時期にある子どもを持つ母親の養育態度は子どもの学年が上がるにつれ変わる可能性があるため、本調査結果の過度な一般化はできない。今後はより多様な属性を持つ母親を対象とする研究が必要である。さらに、家庭における父親、子どもといった家族構成員により母親の養育態度が影響を受けることも考えられる。今後は、このような多様な視点からも養育態度を検討し、関連する他の要因を探る更なる研究が必要である。

謝辞

本稿執筆に際して、ご指導いただきました加賀美常美代先生と貴重なご助言をいただきました査読委員の先生方に深く感謝申し上げます。また、本研究の質問紙調査にご協力くださいました方々にも心より御礼申し上げます。

注

1. 韓国は経済危機だった1997年、韓国内の大手企業は海外進出を図り、それを支えたのが英語力であった。それ以来、英語力のある人材が優遇されるようになった背景がある(佐藤, 2012)。
2. 教育価値観、子どもへの期待、養育態度の相関分析の際、母親の「年齢」、「最終学歴」、「世帯収入」、「子どもの数」を変数として投入して分析を行ったが、これらの属性との間では相関が見られなかったため、重回帰分析における変数として属性は投入していない。
3. Spielberger (2009) は、不安を「状態不安」、「特性不安」と区分した。「状態不安」とは、一時的な緊張、恐れなどを感じる強度で、時間によって変わる状況的な不安である。「特性不安」は、個人の気質による不安のことである。つまり、個々人の中に内在された潜在的な性向により個人が普段感じる不安のことを指す。

参考文献

- 浅川達人・森岡清志 (1994) 「都市社会構造と学校歴獲得競争」『総合都市研究』 (52), 15-26.
- 荒牧草平 (2009) 「教育熱心の過剰と学校不信」『学校教育に対する保護者の意識調査 2008 報告書』 Benesse 教育研究開発センター, 94-105.
- 伊藤美奈子 (1995) 「教師の生徒観・教師観に関する一考察: 理想の教師像による 6 タイプ間比較」『神戸国際大学紀要』 49, 26-34.
- 伊藤美奈子 (2000) 「教師のバーンアウト傾向を規定する諸要因に関する探索的研究: 経験年数・教育観タイプに注目して」『教育心理学研究』 48, 12-20.
- 李徳奉 (1998) 「韓国における家庭のしつけ」『児童心理』 52, 1068-1078.
- 石橋淳祐・堂野佐俊 (2006) 「母親の抱く期待が小学生に与える影響—家族機能と児童の自己効力感との関連から—」『山口大学心理臨床研究』 (6), 3-11.
- 門脇厚司・藤田晃之 (2000) 「日韓中三国の教師・父母・生徒の教育意識の比較検討—『韓・中・日教育意識比較調査研究』をもとに—」『筑波大学教育学系論集』 24(2), 1-31.
- 加賀美常美代 (2004) 「教育価値観の異文化間比較—日本人教師と中国人学生、韓国人学生、日本人学生との違い—」『異文化間教育』 (19), 67-84.
- 加賀美常美代 (2007) 『多文化社会の葛藤解決と教育価値観』ナカニシヤ出版
- 加賀美常美代・大淵憲一 (2010) 「教育価値観の年代・世代間比較」日本社会心理学会 第 51 回発表論文集 578-579.
- 加賀美常美代 (2013) 「大学生の教育価値観の国際比較—7 カ国・地域の質問紙調査から—」『人文科学研究』 第 9 巻 157-169.
- 加藤十八・加瀬豊司・大野達郎・石井政一 (1987) 「日本とアメリカにおける教師の教育意識」『異文化間教育』 1, 98-112.
- 河村照美 (2003) 「親からの期待と青年の完全主義傾向との関連」『九州大学心理学研究』 (4), 101-110.
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法』中公新書
- 神原文子・高田洋子 (2000) 『教育期の子育てと親子関係—親と子の関わりを新たな観点から実証する』ミネルヴァ書房
- 岸川真理子・金児暁嗣 (2000) 「同調行動による状態不安の低減—判断に直接関係しない状態不安によっても同調行動は促進されるのか—」第 64 回日本心理学会大会発表 151.
- 久富善之 (1990) 『教員文化の社会学・序説』多賀出版, 3-84.
- コアネット教育総合研究所 (2009) 「私立中学の校風調査」<http://www.core-net.net/ex2/01/index.html> (2015 年 6 月 15 日観覧)
- 佐藤郡衛 (1990) 「教員の指導観の実証分析: 日米中学校教員比較調査を通して」久富善之(編)『教育文化の社会学研究』多賀出版, 85-145.
- 佐藤大介 (2012) 『オーディション社会 韓国』新潮新書
- 鈴木緑 (2013) 「子どもの健全な成長を考える: 過保護過干渉をしないためには (特集 子どもに過保護な親)」『家庭フォーラム』 (25), 13-23.
- 田渕創 (1993) 「母親の養育態度に影響を及ぼす要因の検討」『川崎医療福祉学会誌』 3(2), 35-45.
- 戸田須恵子 (2006) 「母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について」『北海道教育大学釧路校研究紀要』 38, 59-69.
- 中村高康 (2005) 「日本の教育システムと教育熱—韓国との比較分析—」イ・ジョンガク編著『韓国の教育熱、世界の教育熱』図書出版夏雨, 401-426.
- 坂野永理 (1999) 「学習者から見たいい教師像: 日米学者の比較」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 9, 75-83.
- 私学経営相談センター (2009) 私立大学・短期大学入学志願動向 日本私立学校振興・共済事業団
- 本田由紀 (2005) 『多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリクラシー化のなかで』NTT 出版
- 牧野カツコ・渡邊秀樹・船橋恵子・中野洋恵 (2010) 『国際比較にみる世界の家族と子育て』ミネルヴァ書房, 28-35.
- 南博文 (1999) 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎算雄・立花政夫・箱田祐司(編著)『心理学辞典』有斐閣
- 文吉英 (2015) 「韓国における母親の教育価値観及び子どもへの期待が養育態度に及ぼす影響—首都圏に居住する母親を中心に—」『異文化間教育』 (42) 75-90.
- 渡辺秀樹 (2007) 「家族意識の変化と少子化」小峰隆夫・連合総合生活開発研究所編『人口減・少子化社会の未来 - 雇用と生活の質を高める』明石書店
- Belsky, J. (1984) The Determinants of Parenting: A Process Model. *Child Development* (55), 183-96.
- Eun-hee, P.・So-hee, L. (2004) 「母親の子どもへの期待感尺度の開発および妥当性への研究」『韓国家族福祉学』 (9), 35-56.
- Hofstede, D (1980) *Culture's Consequence International Differences in Work Related Values* Beverly Hills, Sage
- Luster, T., Rhoades, K., Haas, B. (1989) The Relation between Parental Values and Parenting Behavior. *Journal of Marriage and Family* , 51(1), 139-147.
- Sook, L. (1991) 「母親の養育行動尺度の妥当化のための一研究」『大韓家庭学会誌』 29(1), 189-201.
- Spielberger, C. D., Reheiser, E.C (2009) Assessment of emotions: Anxiety, Anger, Depression, and curiosity. *Applied Psychology: Health and Well-being* 1(3), 271-302.
- むん きるよん／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
gymoon1012@yahoo.co.jp

The Influence of Japanese Mother's Educational Values and Expectations for their Children on their Rearing Attitude

— Focusing on the Mothers Who Live in Tokyo Metropolitan Areas —

MOON Gilyoung

Abstract

The first purpose of this study is to determine Japanese mothers' expectations for their children, and child rearing attitudes. The second purpose is to investigate the influence of educational values, expectations for the children of Japanese mothers on their rearing attitude. A questionnaire survey was conducted of 96 mothers of children in elementary school who live in Tokyo and its surrounding areas (Chiba and Saitama prefecture).

Resulting from the factor analyses on mothers' expectations for their children, six factors were extracted: "global tendency", "fluent proficiency in English", "excellent record", "politeness", "intercultural communication" and "rich experience of playing". In addition, as rearing attitudes, five factors were extracted: "inconsistent rearing", "receptive rearing", "tolerance for freedom", "control", and "conformity".

Resulting from multiple regression analysis on the influence of Japanese mother's educational values and expectations for their children on their rearing attitude, this study found that Japanese mother's educational values, expectations for the children are the factors that affect their child rearing attitude.

Particularly, it is suggested that rearing attitude affected by education values and expectations for their children formed by the credentialism, the competition in the exam and increased awareness of the importance of English proficiency should be reconsidered.

【Keywords】 declining birth rates, competition in the exam, child rearing attitudes, educational values, expectations for the children

(Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)